月刊

JMITU

ディスカ

新型コロナ対応版

8月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ　グループ分会　2021年発行

No,440

在宅勤務についてのアンケート
秋闘・年末一時金要求準備

コロナ感染が始まり昨年から在宅勤務を余儀なくされました。出社のリスクはあるが出社しなければ業務が進められない、在宅勤務では業務効率が下がってしかたがない。など、いろいろ問題もあります。

セガでは特別慰労金の支給や在宅手当て（1日３００円）などがありました。

現在のコロナ感染が爆発する中、「原則自宅療養」という政府の方針の下、自宅で亡くなる人が続いている。医療崩壊が極めて深刻な事態におちいっています。重症化を抑える為のワクチンの供給も追いついていない。病院にも入院できない。

この感染はしばらく収まらない、収束が見えない中、在宅勤務はこの先も続く可能性があります。

社内イントラ「ＣＯＭＰＡＳＳ」でも毎日のように、社内の感染者報告がされています。

会社もコロナのおかげで在宅勤務の制度を急遽進めるしかなかったという事もあり、今の在宅勤務が本当に良いものなのか業務としてうまくいっているのかまだ把握の段階だと思います。

組合としても在宅勤務での問題点や不安などみなさんの意見を伺いたく**ホームページ上でアンケートを開始しました。**

「在宅勤務手当てが少なすぎインターネット代も支給して欲しい」「家族がいるので家で集中して仕事ができない。」「本来の通勤手当や事業所での光熱費など会社として経費が浮いているのだからその分在宅手当にまわせ。」「人との対面でのコミュニケーションがなく不安になる。」「上長に確認したいがなかなか時間が取れない。」「出社をしなければならないがもう少し建物の空調、喚起を良くして欲しい。」など今在宅勤務で問題になっていることなどアンケートに投稿して頂けると、これから行われる会社と秋闘・年末一時金の要求交渉において、問題解決に向けて交渉が出来ます。

秋闘・年末一時金要求準備

私たち労働組合は、労働者の雇用と権利、労働条件の改善に取り組む秋闘の準備に入ります。

非正規の雇用・権利

格差が広がっている非正規労働者の権利・労働条件の向上を要求し正社員との格差をなくしていきます。

労働時間の短縮

日本の労働時間は先進国の中でも飛び抜けて長時間のままです。残業時間も含め、１日の労働時間が以上に長いことです。「1日7時間、週３５時間」を目指します。

財界・大企業はコロナ渦に乗じて、在宅勤務や1日の労働時間延長など新たな働き方改悪を進めようとしています。

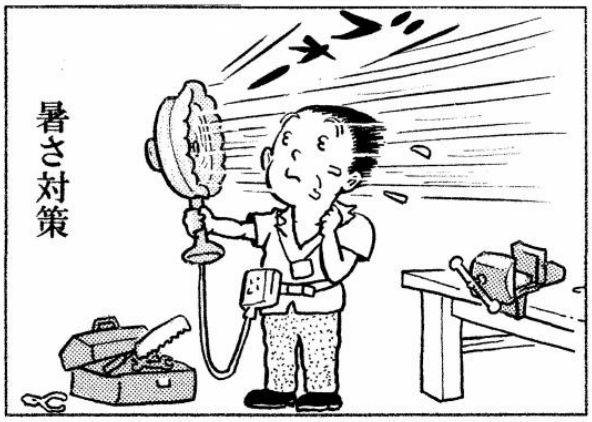
1日の労働時間延長と引き換えの週休３日制も本質的には労働者の生活を破壊するものです。

来月、秋闘・年末一時金要求を提出します。要求項目については来月号にて掲載予定です。

4こま漫画

川﨑よしき

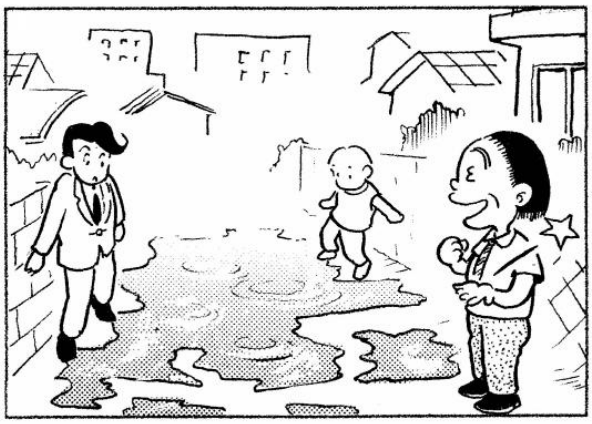
パパ
オシッコ
したい
そこで
しちゃいな
ジャ
ジャ
ジャ


暑さ対策

えっ
いいの？
皆も
してるから
いいよ

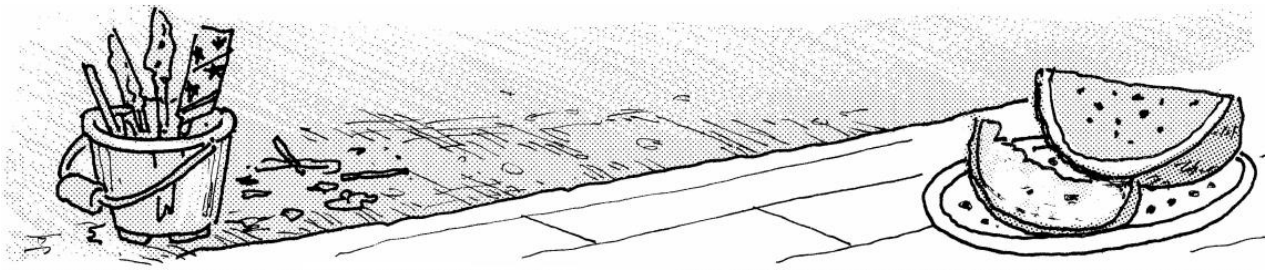
雨対策

もう
二年生
なんだ
から
やらない
ように
しろよ



夢に出て
余計な事を
言うからだ
モグ
モグ

水たまり対策
ブオー
パタ
パタ
パタ



「コロナ馴れ」
窓あいてますよ
ガタガタ
これでいいんです

コロナ対策でこういうのを挿むのは
うっとうしいな
ズルズル

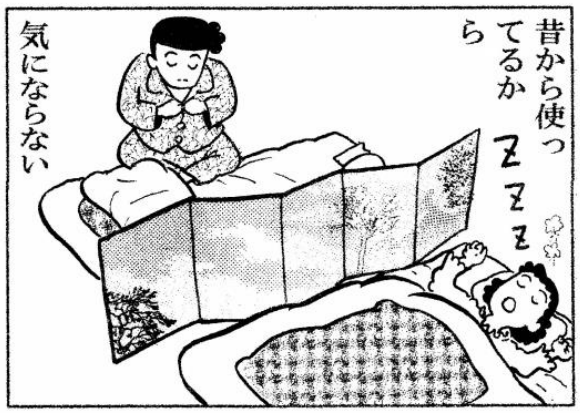
まど開いてます
これでいいんですッ

慣れればそんな事感じなくなりますよ
肉うどん
ええ～ほんとかい？
モグモグ

窓がグイ
ほっときなさいよわざとやってるのよ

うちは
ガチャガチャ

もしもし
窓が開いてますよ


昔から使ってるから
ZZZ
気にならない

掌編小説

心のありよう

仙洞田一彦

八月も残り十日を切った。都会の隅にある鉄筋コンクリート造り四階建てアパートの一室に、独り住んでいる。部屋の中の温度計は三十度を示している。いつもなら三十二、三度はある。朝からずっと曇り空だったからか、今日は涼しい方だ。朝から冷房なしで、扇風機を背中において、机に向かい本を読んでいた。

夕方四時を過ぎた。夏以外の季節なら散歩に出ている時間だ。炎天下には出たくない。家に閉じこもっている日が続くと、何となく体の調子が悪い。だらだら歩きでも、歩いたほうが体のためになりそうだ。いまにも立ち止まりそうな後期高齢者歩きの速さでも、前に進むためには、右足に、そして左足に交互に体重移動をしなければならない。二時間は歩き続けるから、やはり運動になるのだ。歩かないと睡眠にも影響するようだ。歩かない日が続くと眠りが浅くなる気がする。

今日は昨日より三度は低い。歩くべきだ。

そう思っても、体が動かない。下着のパンツ一枚の裸姿から、シャツを着て、ズボンを穿くのが暑くて嫌なのだ。風がある日は部屋の中より外のほうが涼しいくらいだと、自分に言い聞かせても億劫だ。コロナ禍外出必需品のマスクも、人の少ない道を選べば外していられる。しかし、外を見ると、低いといっても三十度の、泳ぐようにして歩かなければならない高密度の空気の層が地面まで下りているような気がする。もう外に出たくない。

新型コロナウイルスが、私の意識に上ったのは去年の二月、ダイヤモンド・プリンセス号の連日の報道からだったような気がする。それから間もなく耳新しいカタカナ言葉が、いっぱい出てくる。パンデミック。オーバーシュート。クラスター。ステイホーム。ソーシャルディスタンス。日本語で言わないのは、賭博場をアイ・アールなどというのと同じだ。さも愛があるような、裏にかくされたくさい意図があるのではないかと思う。また、教養をひけらかされたようでもあり腹が立つ。「三密」は新しい日本語だった。

そして薬局の店頭からマスクが消えた。これは、すでに記憶の彼方になったアベノマスク登場を効果的にするための演出かなどと、過去の時間の経過が鈍くなった頭で勘繰ったりする。

去年と今年の夏が、一昨年の夏と違うのは同じ道を同じように散歩していても、どこで感染するかわからない恐怖に付きまとわれていることだ。人通りの少ない道を歩いていても、その感覚は消えない。

連日、新規感染者は先週の同じ曜日を上回ったとか、重症者は昨日を上回り過去最高とか、入院できない自宅療養者急増などと報じられている。去年の八月の東京の新規感染

者は二百人前後、多くて四百人台はまれではなかったか。今年八月の東京は五千人を前後している。一年前の十倍から二十倍だ。最近は専門家から「制御不能」などという言葉までとび出している。

毎日脅迫されている。「緊急事態宣言」慣れしているとか言われるが、恐れていたら生活できないから動いているのではないか。好き好んで危険に身をさらす者は数少ないのではないか。テレビで通勤電車や駅で見られる出勤風景を写し、記者か、解説者か知らないが、「宣言が出ましたけど、人流が減っていません」などと言うのを聞くと、「働かなきゃ食えないっていうのを知らないのか」などと思わず憎まれ口に出る。働かないで食える人は、混雑する電車に乗らないだろう。

世の流れから外れた後期高齢者も、毎日の脅迫に慣れるよりも、暑さも加わってイライラを募らせている。

もう四時半になってしまった。

外から救急車のピーポーという音が聞こえてくる。ここは目抜き通りからも外れているし、鉄道線路で遮られ踏切がないところなので車は少ないところだ。コロナに加えて熱中症もあるせいか、そんなところでも、救急車の音が聞こえてくる回数が増えているようだ。病院のベッドに空きがあったのだろうか。入院できないから自宅療養だなどと言っているが、現実は療養でなく自宅への放置。本人が苦しがっていても、何かの数字が基準以下だと運んでくれないらしい。助けてくれと、何かにすがろうと伸ばした手を、邪険に振り払うようなものだ。

救急車を呼べば助かるもの、助けてくれるものと思っていた。事故でケガをした時、中毒にでもなった時、とにかく病院に急いでいかなければならないのに、自力でいけないときに電話すればいいと思っていた。手を伸ばせば届くものと思っていたのが、そうではなくなった。

あれこれ考えているうちに五時になった。晩酌の時間だ。私は机から離れた。今日も散歩なし。

冷蔵庫に酒がなければ買いに行かなければならない。冷蔵庫のドアを開けたらビール一缶が入っていた。

缶を取り出し、コップを持って、食卓の椅子に腰かけた。缶を開け、コップに注いで一口飲んだ。テレビをつけた。首相の顔が映し出された。すぐにチャンネルを変えたら、今度は都知事の顔が映った。また別のチャンネルに変えたらオリンピックだった。

テレビのスイッチを切った。

「すみません」

ドアの方から女性の声が聞こえた。ドアはドアチェーンの分だけ開けてあった。その隙間から女性が顔を見せていた。知らない顔だから何かの勧誘か販売だろう。隙間から見える女性の顔は若くはなかったが、それほどの年にも見えなかった。

私はパンツひとつだから土

間と部屋の間に下がっているカーテンに隠れるように立ち、顔をのぞかせて「何ですか」といった。その言い方には、テレビのスイッチを切ったままのいら立ちの勢いがあった。

「心のありようを」と女性が言った。

「心のありよう」

私は反復した。女性はうなずいた。そのあと話がどう続くのかわからなかったが、聞く必要も感じなかった私は、物売りに答えるように「間に合ってます」答えた。

「そうですか」と、反論も補足もせず、女性はドアの向こうに顔を隠した。遠ざかる足音が聞こえた。

ビールのある食卓に戻り、腰かけた。

「こころのありようか、間に合ってないなあ」

つぶやいて、一息つくと、注いであったビールを一口飲んだ。